

はず地獄を恐れず、順逆兩境の上に超然として自在の活動を爲し、生死岸頭の彼岸に悠然として縦横に遊戯するは禪なり。」と。自分は是を見て忽ち電氣にでも打たれたかの如くに驚きを感じ、多年尋ね廻つて居た妻子親友の居場所が知れたかの如くに感じて多大の期待と希望とに充たされて、早速に入會の手續に及んだのである。爰に自分修養上の一新紀元に入つたのである。

接心第一日

發會の日は到來したし、會員總計拾五名、中に官吏あり教員あり醫師あり休職軍人あり會社員あり商人あり學生ありて、各種各方面の人が連なつて居る。想ふに是等會社員諸君の中には、自分と同様に一種の煩悶を抱いて居てそれを解決の希望からして入會した人も有るだらう、中には又一種の興味を以て加入した人も有らう、其動機の別なることは其職業の別なるが如くで有つたことゝ察するのである。

式は先づ道場に充てられた一曹洞宗寺院の佛殿に於て擧げられた。三村老師家が式師と成り主任住職の方や其他數人の附近僧侶諸師と共に讀經回向が勤められた。自分達一同は佛前に列座して三拜し端坐して靜かに讀經の終るを待つのである。

次に入門式と云ふが行はれた。所謂、師弟の禮が成立のである。師家は嚴然と威儀を具へて椅子に寄られて居る。自分等は前後二列に並立して師家に對す。椅子前には香臺に香爐が置かれて有る。幹事の一人が進前して恭しく名香を焼くや、一同は合掌三拜の禮を行ふ。幹事は一同を代表して致語と云ふを陳す。「致語に曰く、『生死事大無常迅速、願くは老大宗師大慈大悲、我等が爲に佛祖の大道を參學することを聽許し給へ』と。師家が『發心求道感激の至りに耐へず』と許容の辭があると、更らに幹事が『即日氣雲漸く寒し、恭しく惟れば老大師尊候起居萬福』と、一同は再び合掌三拜して位に就て端座する。爰に於て宗師は一場の垂誨と云ふて、修行の要路を指示せらるゝこと四十分程であつた。垂誨の要點は先づ禪の起りから傳燈の次第に及ぼし、此道の尊嚴

なことに、修行者は極めて眞面目で熱心なるべきこと、飽まで師家を信頼して我意我見を放下すべきこと、普勸坐禪義に依つて坐相を學び心身氣息を調ふべきこと、師家より授かりし公案を專一に功夫して餘念を離へてならぬこと、接心期間だけに限らず平生も朝夕坐禪すべきこと、入室獨參を勵行すべきこと、室内の消息は他に漏らすまじきこと、諸方の師家方の好惡長短を批評すまじきこと等が重なることで有つた様に記憶するのである。垂誨が濟むと一同は頓拜し師家は室内に歸入せらるゝ。室内の振鈴を聞くや自分達は一人別に入室して、師家から公案を授けらるゝ。一兩三人は濟んだ。いよいよ自分の番が來た。

無心無心大無心！是が自分が授けられた公案である。自分は其時に公案の意味が解らぬので、一寸考へかけた。すると、師家は釋して云く、子が胸中の不安も不平も煩悶も、要するに子の心あるに依る、大無心の當體には一切の煩悶苦惱あることなし、子それ去つて專一に功夫し來れと。

一同の入室が濟むと、坐堂の位に就て坐禪が始まる。坐禪中に亦主任の住職の方が、色々と接心中の心得や功夫の仕方に就ての御指導がある。やがて經行と云ふて一同起つて室内を徐かに一匝する。是で足の痛みが治る。善くしたものだと感じする。一匝了つて亦坐禪すると、今度は普勸坐禪義と云ふを一同で諷誦する。是で開枕とて就寢になる。接心第一日が終る。時に午後九時半、自分は學期休みの此一期間を幸ひに、晝夜專一に功夫して是非とも大安心を得たいものと、堅き決心を以て歸宅したのである。

第二日

午前五時より道場に詰め掛た。恐らく自分が先頭第一番だらうと坐堂を見れば、既に端然默坐の師家の姿を見受たのである。無心無心大無心?! 全精神を注いで功夫する。解らぬ。無念無想の境に入らうとする。却つて妄想が次から次と間斷なく起る。やが

て振鈴を聞いて一人毎に順次入室獨參が始まる。自分も入室して一言二言理屈を述べ
 る。師家から忽ち、嘖と叱責されて悄然として退く。無心無心大無心と功夫を勵む。
 中々無心になれぬ。午前と夜間とに師家の提唱と内講とが有る。提唱は師家編輯の清
 流六門集と云ふ祖師の機縁、講本は普勸坐禪義、其間に又獨參が有る。他の會員何れ
 も懸命に成つて功夫して居る。熱心なものだ。然し未だ透關底の者は出来ぬらしい。
 自分は豫ねて催眠術を習得して居たので、其を一番應用して見やうと氣が附た。早速
 自己催眠の法に依つて、催眠無自覺の状態に入つた。爰だなと思つて早速獨參して述
 べた。すると、師家は大喝一聲、馬鹿！と來た。其様なのは外道の無心と云ふものだ、
 佛祖の大無心と云ふはナ、時處縁を簡ばぬ大自覺ある大無心で有るワイと、叱せられ
 て又悄然退却サ。サア解らぬ。自覺が有つて其で無心とは。斯くて第二日も不得要領
 中に終つたのである。

第三日

今朝こそ首尾善く先登第一の坐堂入を心得て、獨り悦に入つて居た。兀々として端坐
 功夫に入る師家の口宣と云ふて垂示がある。獨參が始まる。自分は色々の理屈を持込
 で見た。人間は生命の通ふ間は無心になぞ成れるもので無いとか、木石の如き無心に
 成るのは望ましきことで無いとか、無心と云ふは一事に熱中して餘念無きの状態を指
 すのだとか、色々の理屈を。其度ごとに師家から或は叱られ或は笑はれして、更らに
 痒い處に掻き當てぬので獨り苦しむ。愈々益々熱烈勇猛に功夫を凝らす。開枕の時間
 が來たが、自分は今晚は徹夜の坐禪を試むることに決して、同志の三人と共に堂内に
 居残つて功夫を續けた。大無心の地に到り得ずんば誓つて此座を立たすと云ふ位の意
 氣込で。夜は次第に更けて來る、寒冷は身に迫つて來る、頓てビーンと一時を報する
 時計の音を聞くと同時に、廓然として氣が附た。斯だ斯だ、是に相違無いと、些の疑

情なく些の不審なく、了々として大無心が自覺された。天明を待つて獨參せんものと、實に一刻千秋の思ひで待ち受けたのである。

三九〇

第四日

老師の洗面了るを見るや特に獨參を願つて入室す。サー何うだ、と一拶さるゝや、自分分は渾身の力を氣海丹田に込て、徹底大無心！と斷言したのである。師家曰く、恁麼に云ふ底の汝が五尺の身はこれ何ぞ。自分は言下に、無！と獅子吼一番したのみ。師は是時嚴然として拶せられた。汝若し徹底大無心の境界に到達せしとせば、必定その境界に應じた大自在の活用の有るならん、イザ試みに全身無影象と成つて障子の破れ目より隣室へ飛び出て見よと。自分は即時に無相三昧に入つて、方二三寸の破れ目より隣室に飛び出し、更らに襖の空隙を透つて本座に歸つて低頭したのである。師家更らに、然らば焰々たる爐中の炭火を掌中に握り持ち來れと。自分はヤオラ無念無想定

に入つて赤き炭火を握つて師前に呈し、然も平然たるもので有つたのである。師は更らに、庭前に飛び居る雀を捕り來れと。即時に幻身三昧の大禪定に入つて、苦も無く一羽の小雀を生擒して呈露す。其他に猶も、池中の魚を手も濕さずに捕り來り、或は飛行通を現じては空裏に翻身し、天眼通を現じては本箱中の書冊類を讀み當て、他心通を現じては宗師家が心中を觀破する等、その神變自在の妙不可思議作用、實に餘人の知る處に非ざるを覺つたのである。此時に師は示して云く、汝今や吾が門内の人たるを得たり、然し乍ら其處に止まつてはならぬ、更らに進んで堂奥を究むるを要す、努力せよや務めて退轉すること勿れと。懇篤の垂示で有つたので、自分は流汗禮拜して室内を出でたのである。此時の喜悅歡快は千萬無量、實に譬ふるに物なきの狀であつた。自位に歸來端座默然して法味法樂の禪悅食に飽滿して此日の午後及んだのである。

次の入室時に授かりし公案は、趙州一物不將來之話と云ふので有る。師は座右の祖

録を開いて其公案を示された。其全文を和訓にすると、「嚴陽尊者、趙州に問ふ、一物も將ち來らざる時は如何。州云く、放下せよ。嚴云ふ、已に是れ將ち來らざる時この何をか放下せん。州云く、恁麼ならば擔取し去れ。尊者言下に大悟す」と云ふのである。自分は退いて潜かに功夫すらく、この一物不將來と云ふは、即ち自分が透得した無心無心大無心の當體では無からうか、今趙州が放下せよと云はれた、……放下するものが若し有りなば大無心では無い、大無心ならば這の何物をか放下すべきで有らうかと。晩に至つて師家の提唱中に「金屑は貴しと雖も眼に入らば翳と成ると云ふ古語も有るから、諸人も注意するが善い、鐵の針金からは脱け得ても更らに黄金の針金に縛られぬ用心が肝心である」といふ話があった。此時自分は頓と氣が附たので、間もなく獨參した。禮拜着座するや否や、師は直ちに拶問さる。一物不將來の端的は何うぢやツ。自分は言下に雙手を展開して師に呈示したものである。師、未在未在と云はる。自分は師が座前に横たへ置かれし笏を取りて高く師の頭上に捧ぐ。すると師は驚

直に奪ひ取つて矢庭にスポンと自分の肩を打すること一下、其間實に電光石火の活作略で有つた。自分は、斯に默識神通、始めて師家の機用を悟了し、當處に三拜したのである。

第五日

今朝の公案、「小雀が石の鳥居を踏み折つた」退いて功夫するに、小雀は少にして軽く鳥居は大にして強しと、凡見を以てしては此公案は難解ならんも、頂門上の一隻眼を以て看破せんに、又只これ尋常事のみ。獨參して曰ふ、石は折れ雀は飛で跡も無しと。師云ふ好し然らば、橋流れて水流れずとは作廢生。退いて功夫するに、橋と水との相待を認めて流と不流の差別に迷ふは是凡見のみ、佛祖の大道は只一以て貫く、横に空間を超え縦に時間を越ゆるもの即ち大無心の平常心のみと。即ち獨參に云ふ、流を云ふ時んば盡界流れ去つて一塵を存せず、不流を云ふ時んば全界これ水より外に一物な

し。師云ふ、面前の青山を移し來り得てんや。自分は只火鉢の埋火をかき起し、師の膝下に進めて室を出て去つたのみで有る。

第六日

此日までには會員中に、五人程の透關底の漢が出来て、何れも喜悅と感激とに満ちたる様子にて、修行を勵むのである。今朝の公案は死生問題の解決で、「自性を識得すれば頓に生死を脱す、眼光落地の時作麼生か脱得せん」と云ふのである。自分は退いて終日此公案の落處に就て功夫したのである。晩に至つて師家が口宣中に、「正法眼藏」中の祖訓を引き、「大聖は生死を身を任す、生死を心に任す、生死を生死に任す」と云はれしを聞く時に、覺えずボンと膝を打つたのである。即ち獨參す、既にこれ眼光落地し來る、生もなく死も無し。と云ふに師は、未だ々と云はる。自分は再び、大生や全生や千里一色の春、大死や全死や古今一様の冬、と云ふたのである。師家は此時

莞爾として脱落脱落と證明せられたのである。

第七日

此日自分は別に公案も授からず獨參もせず、只初日以来の過程に就て綿密に回光返照の退歩を學したのである。回顧すれば自分は、修養と云ふことに就ては、永い間、苦勞もし來たのであるが、今日初めて肩が軽く成つた様である。徹底大無心の端的こそ、我も無く人も無く迷も無く悟も無く生も無く死も無き、宇宙全一の全體現身で有る。名の名くべき無く強ひて名くれば道とでも云ふべき歟、然も斯道は我等禪者が平生底の著衣喫飯の上に現じて缺くことが無いので有る。觀じ來れば森羅萬象は各々自位に住して、獨立無伴、大光明を放ち大無心の往來を爲して居る。此見地より吾々の修養を觀じ來れば、是まで無價値——では無くとも大意義が有るべしとも思はなかつた事共が其儘みな活きて來る。即ち一日一善も直に全日全善であり、一進一歩が直に全

進全歩であり、一小個人の存在が直に盡十方界自己全身であつて、二も無く亦三も無き絶對待の面目で有る。更に此見地から自分の宗教心を吟味して見れば、今日の自分をして斯る妙境界、斯る大解脱地に到るを得しめ給ひし大恩教主釋迦牟尼佛陀は、我々の教祖であると同時に、此歴史的の現身佛を透して、大無心地に安住し給ふ所の釋尊の大悟界のそれが法身佛の本體であり、大慈悲大智慧等の諸般無量の力こそは、報身佛の當體である。此三身即一の釋尊が實に吾々の本尊であるので、吾々が無心三昧に住して禮拜信仰するとき、彼と吾とが互ひに大無心地に在て融合一致し、所謂入我我入の妙信仰が成立のである。此信仰は所謂自力でも無ければ他力でも無い。強ひて云へば自他を離れた妙力である。禪は實に宗教中の宗教である、哲學以上の大哲學である、修養中の最大修養である。

後記

接心一週間の期日は盡きた。最後に師家から淳々たる口宣が有つた。垂示の要點は接心が濟でも會員は居常修行を怠つて成らぬこと、此法門は修證不二の法門と云つて、證りは人々分上に本來具有底のもので、新たに得べきものでは無く、修行は證りを得んが爲めの修行では無くして、本來の證果を染汚せざる爲め、永久無限に相續すべきもの、随つて些の省悟なき人も失望退轉するなく、既に入處を得たる人も益々精進あるべきこと、佛祖甚深の大法を念じて感謝報恩の誠意を盡し、正法弘通の道念を體して獻身努力すべきこと、味噌の味噌臭きを嫌ふと知り、妄りに門外無縁の人々に對して禪者風を吹かすまじきこと等が、大體の要點で有つた。斯くて茶話會が開かれ、各自の懇談親話が交換され、次回の再會を楽しみに、惜しき別れを告たのである。

三人形塚の由来

素堂居士 片山麟一

私は岡山縣備前の者です、福島縣立農林學校教諭として拾餘年間、河沼郡坂下町に居住して居ります。郷里には両親も健在してゐますを幸ひに、自分の修めた農學を以て些か勤めさして貰つてゐるのです。今回自分が發願して、會津の靈地と云はる、柳津虚空藏尊のある、圓藏寺境内に人形塚といふ、餘り世に類を見ない所の物を建立したに付て、師家の御勧めに應じて、茲に少しくその由来を述べさして頂きます。

今から拾年前に、當地曹洞宗法界寺さんで、成道會修行に際し、三村老師を招聘して一週間の御講演を願ひました。其際に老師は一般の説教の外に、特に一部有志二三十人の爲にとて禪録の提唱をして下されました。自分も其時に參詣しまして、始めて

佛教の御話し、殊に禪の何物たるかを御聞き致し、從來壯年血氣の身の幸ひ物質的に何の不足も感せず経過せることゝて、宗教の信仰といふに付ては、誠に無關心であつた私にも、やゝ佛教の有難み、殊更禪の妙味に引附けられました。茲に入信の動機を得た次第です。

夫れより直ちに、法界寺、定林寺の兩御住職の指導の下に、坂下修道會といふを組織して、三村老師を師家と仰ぎ年々春秋二回に一週間宛の攝心會を修行することゝ成り、本年度滿拾ケ年に達した次第です。然る所に不思議なことには、私達が結婚以來拾五年も経過して、更らに一人の兒も産み得なだため、唯一つの不足として心寂しく感じ來りし家庭に於きまして、自分が參禪三年目に於て、謀らすも一人の男子を擧げ得たことは、實に何たる嬉しき事でしたらう。私は時に感じました「一切衆生は皆これ佛子」と、是は私の兒で無い、佛の子である。テ早速老師に御願ひして、名附け親と成つて頂きました。老師は「美智雄」と命名下さいました。正因佛性としての此

の子は、生れのまゝで、三徳法身を具足して居るので有る、否や一切衆生は、皆な共に然るのであります。

月日の経過は早いもの、美智雄は昨年、學齡に達しました。私は美智雄に向つて申しました、御前は四月からは、學校生徒に成るのだから、玩具や人形や繪本の破れたものは、一切不用の物だから、棄て、仕舞ひなさいと。その時にです、美智雄は、一滴の涙を流しつゝ、「イヤ、是は私が長いこと仲よく遊んだ友達だから、決して棄てないのだ」と。私は此の子供の言下に於て、大いに自得する所があつたのです。

佛身は法界に充滿して、普く一切群生の前に現す。トカ聞きました、亦是禪には嬰兒行といふが有ることも味はつて居ます。このせち辛い浮世の塵を超越して、最も天真爛漫で、麗はしいものは實に子供の心であります。小供が木の切や石や礫を積んで家を造るのは、大建築家が彼のビルディングを建てると同様の意義があるのです。子供には人形や玩具が、時により言葉の通ずる人間よりも、更に親しみが有り、なつかし

みが有るのです。然るに大人の心を以てこれを塵埃の如く、捨て、了へといふことは餘りに無慈悲のことでは有りますまいか。

一 莖草を拈じて丈六身となし、丈六身を請して一莖草と爲すと。木人も土偶もみな共に大光明を放ち、廣長舌を以て、晝夜無間斷に無字の説法を續けられて居ります。たゞ人我の執著あるによりて分明に聴取するものが少ないのです、人形塚建立の動機は實に爰に起つたのです。幸ひにも子供達の伯父さんと云はるゝ、巖谷小波先生、小川芋錢畫伯、堀内中將、福來博士、縣廳や郡役所の方、圓藏寺御住職、地方の代議士、縣會議員、等其他の御賛成の下に、四月廿一日を以て、世間に餘り類例なき人形塚の立塔を了じ、老師の開眼導師を御願ひして、盛大なる擧式を果し、猶も向後は年々人形供養を修行するはずに成つて居ますること、誠に本懐の至りで御座います。當日老師が開眼式の、拈香法語を左に録して置きます。

石女彈琴無韻歌

木人間卷賦三平和

人形塚の由来

全身没却親ニ孩幼ニ

嬉飽如今歸ニ那迦ニ

露

草も木も石も瓦も人形も

みな御佛の姿なりけり

人道より悟道へ終

大正拾貳年六月廿十日印刷
大正拾貳年六月二十一日發行

正價金貳圓五拾錢

不許複製

發兌元

東京市神田區駿河臺
西紅梅町六番地

日本禪書刊行會

(振替東京四六三四〇番)

著者 三村洗耳

發行者 今井助松

印刷者 柴田孝吉

大賣捌

東京市神田區錦町一丁目
大阪市東區淡路町四丁目

二松堂書店
登美屋書店

日本禪書刊行會發行圖書目錄

△書留は凡て函入とす

宮地宗海禪師題 間宮英宗老師述	此間了空老師著	伊藤圓定師著	伊藤圓定師著	菅原洞禪師著	伊藤圓定師著	伊藤圓定師著
通俗禪とは是ぢや	治肺養生哲學	科學上より觀たる極樂の實在	演壇座談應用自在 笑話の泉	教壇家庭應用自在 訓話の泉	世界十大宗教早わかり	自然科學と佛教の妙味
定價金貳圓 書留送拾五錢	價壹圓四拾錢 送料六錢	價壹圓八拾錢 書留送拾五錢	價貳圓八拾錢 書留送拾七錢	價貳圓參拾錢 書留送拾五錢	價五圓參拾錢 書留送廿七錢	價貳圓 書留送拾五錢
禪の書汗牛充棟も當ならず 然も本書は禪中一書明解 て何人にも一讀明解べし 老師肺患を病み其實の養生 法を示さる萬病除床慰安養 病四十八手等治法秘訣載 極樂地獄の有無は來問 ちて其實在を論じ至玄至妙 一著抱腹絶倒眞に笑話の權 餘種を収めては珍談佳話の 本書は著者七年間實地集 輯されし現代訓話全集なり 猶太教基督教回教羅門印 度教佛敎喇嘛教諸教の神 道等精髄を極め要領を盡し 自然界の現象と佛教の教理 しと併せその妙味を説き仰						

菅原洞禪師共著 松本耕風師	佐々木珍龍師著	富田荒木兩師序 守山聖眞師著	守山聖眞師作	長谷岡唯見師著	長谷岡唯見師述	八大禪師題贊 池上文僊畫伯著	高津柏樹禪師題 池上文僊居士著
通俗新解 碧巖錄物語	佛敎講話 先づ爾に與へん	史的 秘密佛敎講話	空海阿闍梨と如意尼	最新科學より觀る 佛教の批判	生死及來世の哲學	一畫 達磨百圖	禪畫 挿解 どうして悟るか
價五圓五拾錢 書留送廿參錢	價壹圓八拾錢 書留送拾五錢	價貳圓八拾錢 書留送拾八錢	價壹圓八拾錢 書留送拾五錢	價壹圓八拾錢 書留送拾五錢	價貳圓四拾錢 書留送拾五錢	小包料廿三錢 定價金七圓	價壹圓四拾錢 送料六錢
碧巖錄は古來禪門第一の書 也書出で此嘆始めて無し 老師の講話は穩健着實を以 て誠に見るべき青年必讀書 通俗的眞言宗史は本書を嚆 矢とす印度より支那日本の 密教状態を傳へて趣味津々 弘法大師の生涯と如意尼の 戀の事實を面白き好戯曲なり もこの實に面白き好戯曲なり 最新科學の活動批評したる名 著也靈の活動深も知るべし 内容を生活靈魂轉生境界の 四篇に分ち來世生活の淨化 法を説く何人にも一讀すべし 著者は禪畫の名家也客年白 雲樓中に入り今此書遺さる 永世不朽の好手本とす 本書は禪の初歩より説き禪 話一冊の初歩より説き禪 む此書神髓の初歩より説き							

大友洞達師著

新釋 原人論詳解

小包送八拾錢

原人論は佛書中の名著也然も未だ斯の如く完全なる詳解あるを見ず萬人是非必讀

中野隆元師著

現代 佛教二十講

書留送八拾錢

毎歳五萬の聴衆を感化する三編廿餘章悉く感齋の文字

中野隆元師著

民衆講話 信仰の勝利

書留送六拾七錢

著者専門の傳道學より信仰の勝利を七講に分けて説か

十二禪師題序
菅原洞禪師編著

日本禪門偉傑傳

書留送八拾九錢

日本古來の禪門巨匠四十餘人を捕へ來つて從横自在に

宮地文學士著譯

講演資料 逸話と學說

書留送八拾參錢

本書は歐米の珍話と日本の實業の訓話と社會根源の哲學とを收む博學宏智の泉也

各宗諸師顧問編輯

（毎月一回十五日定期發刊）

各宗 布教の友

一部（送料共）金貳拾錢
一年分（前金）貳圓廿錢

（大好評）

各宗派に偏せず宗義に囚はれず、嚴正中立公平無私、飽迄自由の位置に立ちて現代佛教に新生命を與へ、且又各宗諸師に通佛的教材を提供し、佛教と社會との改良を計る専門雜誌。

504
208

終

